

## 廬隱《象牙の指輪》に見る戀愛の技法

——イエスとノーのはざまで——

高 屋 亞 希

### 1. はじめに

廬隱（1898～1934）の長編小説《象牙の指輪》は、友人の石評梅をモデルに、悉く實を結ぶことなく終わった彼女の戀愛の顛末を描いた作品、として知られる。この小説は、張沁珠という女性が若くして亡くなった後、素文と露沙という彼女の女友達が、彼女自身が書き残した日記や手紙を所々に引用しながら、彼女の思い出、とりわけ幾人かの男達との戀愛の経緯を、互いに語り合うという設定になっている。<sup>(1)</sup>

沁珠が體驗した幾度かの戀愛の中で、最も紙幅がさかれているのは、2度目の戀愛に当たる曹子卿との関係である。子卿が自分との戀愛を斷念してくれることを望んでいた筈の沁珠が、子卿の死後、あたかも彼に操を捧げるかのように、彼の墓前で涙を流す日々を送るようになる。子卿から贈られた象牙の指輪を、彼の死後、右手の中指から左手の薬指に嵌めかえる沁珠の行爲が象徴しているように、子卿の生前と死後とでは、沁珠の對應に落差が見られることが、彼女の眞意を読み手に謎として見せているのだろう。表面的には子卿にノーと言っていたが、内心では彼に戀愛感情を抱いていたのではないだろうか？ だとしたら何故、沁珠は自分の眞意を偽ってまで、彼にノーと言わなければならなかったのか？《象牙の指輪》は概ね、戀愛の成就が望めたにも拘わらず、終にイエスを選びとれなかった女を巡って、彼女の眞意がどうであったのか、という問題設定の枠組みの中で讀まれてきたと言える。<sup>(2)</sup>

しかしそこでの讀み手は、本來、男女が各々の思惑に従って、自分が望む異性を獲得しようと、或いは望まない異性の求愛から逃れようと、駆け引きする過程である筈の戀愛を、女が「自然」な感情に従うか否かの問題に轉化している。つまり、沁珠が自分の「自然」な戀愛感情に忠實でありさえすれば、二人

の戀愛が成就したであろう、という読み手の根據のない期待が、彼女が生前の子卿に突き付けたノーの選擇を、自分の感情を偽った表現として読む、原因になっているのだろう。

本稿では、沁珠が子卿にどのような關係を求めていたのか、また彼女の思惑とは別にどのような關係を選ばされたのか、という二人の戀愛の駆け引きの経緯を具體的に検討する。それは戀愛を、男女が抱く「自然」な感情の發露の結果としてではなく、男女雙方がどのような關係を構築するかを巡って、駆け引きする「技法」として、對象化していくことでもあるだろう。

## 2. 戀愛という名の遊戯<sup>ゲーム</sup>

沁珠と知り合う以前に、親が取り決めた相手と不本意な婚姻關係を結んでいた子卿は、沁珠との結婚を具體的に進めるため、歸郷して妻に離婚を切り出す。離婚が成立したことを沁珠に知らせる手紙は、達成感の喜びに溢れている。

彼女〔＝妻〕が乗った車の影が、枝垂れ柳に遮られてようやく、私は失意の氣分で引き返しました。しかし私は突如として、あなたと私の間を妨げていた膜が完全に一掃されたのだ、ということに氣付きました。〔妻への〕悔恨に覆われていた心が、たちまち明るく生き生きとした状態を取り戻しました。……そうです、私はこの世で、“自己”のためにこそ努力してきたのです。私が望むのは、ただ私が敬愛する人の心だけで、私は今それを手に入れたのです。（p972）

離婚には應じたものの、子供を取り上げられ、一晝夜泣いた妻は、家を出るに際して、子卿と目を合わせまいとする。妻による精一杯の無言の抵抗は、妻に對する“憐憫とも慚愧ともつかぬ”（p972）感情を子卿に抱かせるののだが、そうした妻との抜き差しならない葛藤が、沁珠との戀愛結婚を實現するための必要な一歩と位置付けた途端、彼の意識から消去されていることが伺える。更に注意すべきなのは、その戀愛結婚を實現するための過程が、“自己”を實現するための努力の過程と、等價で置かれていることである<sup>(3)</sup>。當事者の自由な意志に基づかない婚姻は、男女雙方にとって幸福とは思えないので、婚姻を解消

することは正當なことだという論理で、妻に離婚の正當性を訴えた子卿にとって、離婚とは無理やり親に選擇させられた、不本意な制度的關係を解消し、沁珠との戀愛という「自然」な狀態を回復する、ということであろう。従って彼の言う“自己”とは、制度から解放されるべき「自然」としての“自己”だ、と考えられる。

「自然」な“自己”を回復するために抑壓的な社會制度と戦う、という子卿の戀愛を巡る言説は、同時に革命への参加を正當化する言説に重なる。子卿は、自分が革命工作に参加していることを沁珠に打ち明けた時に、そもそも最初に彼女と出會った折、革命についてそれとなく示し、それに對する彼女の反應に自分は満足したと述べている。即ち彼は、革命工作に對する潜在的なシンパとして、沁珠を認知していたことになるだろう。このことが沁珠を戀愛對象として選んだ、理由の一つになっているのかも知れない。だとすれば、子卿にとって沁珠との關係は、制度的抑壓から「自然」な“自己”を回復するという大義を、二人の間に挟むことによって成立していることになる。つまり沁珠との關係は、共に大義を目指す對稱的なものと認識されていることになり、一人の女である彼女といかなる關係を構築するかということについては、子卿は全く意識していないと思われる。しかし、子卿から離婚成立の手紙を受け取った沁珠にとって、戀愛結婚は“自己”を實現するものなどではない。子卿と結婚するのかと問いかける素文に對して、沁珠はそのつもりは全くないと答える。

女の子が男に、言い寄られたり崇拜されたりする價值があるのは、まさに女の子であることによってなのよ。もし誰かに嫁いだりしたら、たちまちただの墜落した星。光も熱もないのに、誰が彼女に取り合ってくれるというの？ だから私は結婚なんか全然したくないわ！（p973）

男と戀愛關係を構築していく過程のうち、沁珠が價值を置いているのが、自分が戀愛對象として、男から關心を向けられている狀態であることが伺える。言い寄ってくる男に對して、女が力を行使できるのは、その男へ最終的に與える答えが、まだイエスともノーとも決定されていない狀態でしかないことを、沁珠は冷靜に認識し、自らをその狀態に止めておこうとしていることになるだ

ろう。子卿が身分を明かした時の沁珠の日記は、彼女が價值とする“自己”が何であるかを、明瞭に示している。

私はこの一生で、結局どの道を歩むべきなのだろうか？ この問題は本當に複雑だ！私は賑やかな生活を必要としているかのようだ。だがまた、この賑やかさを必要とする憐れさに對しては、更に悲しく感じるようでもある。それでは分に安んじて己を守り、平凡な女になろうか。良妻賢母も悪くはない。だがいかんせん私の心は、こうした生活には一時も耐えられないと感じるのだ。〔中略〕私はただ單に、他人のために生活するだけのお飾りにはなれない。私は“自己”を尊重している。いつの日か、もしその“自己”を失うようなことがあったら、それは私の生命を失うことに他ならない。曹〔子卿〕ときたら、本當におかしい。何だって、どうあっても私に縋い付こうとするのだろうか？（p949）

沁珠は自分が何をしたいのか、具體的なヴィジョンを持っているわけではない。彼女が考えている人生の選擇肢も、自身で言うほど複雑多岐なわけではなく、賑やかな生活と平凡な結婚生活の二つの選擇肢が示されているだけである。彼女が人生の選擇で思い悩んでいるのは、特定の男にイエスというべきか否か、という問題である。そのような沁珠にとって、子卿と同じ意味での、未來に實現されるべき“自己”などあり得ない。事實、彼女にあるのは今現在、尊重し失うまいしている“自己”なのである。その“自己”は、他人、即ち特定の男との結婚生活によって失われる、と語っていることから、現在の賑やかな生活の中では既に確保されていることが伺える。また沁珠の選擇肢には豫め、男との關係性を巡る選擇肢しか用意されていないことから、ここで言う賑やかな生活というもの、恐らく前述した、最終的なイエスやノーを保留にすることで、男への選擇權を慢性的に確保している状態を指していることが、推測される。従って沁珠の“自己”とは、男との具體的な關係の中で行使され、且つ特定の男にイエスという結論を下さない状態でしか確保し得ない、言わば男に對してイエスやノーの選擇權を有する主體、と言えるだろう。だとすれば、沁珠がここで言う“自己”とは、戀愛遊戲で「技法」を行使する主體であっ

て、「自然」な戀愛感情の對極にしかあり得ない。

ここに、子卿を愛しているという「自然」な感情を偽り、戀愛の成就を選びとれない女の姿を読む必要はないだろう。より重要なのは、無防備に「自然」な戀愛感情に身を任せ、男にイエスを與えることが、男との具體的關係の中では、男への選擇權を保有した“自己”を失う、即ち男に主導權を奪われることに繋がる、と沁珠が認識していることである。子卿に限らず、彼女が全ての男に對して最終的なイエスを與えないことが豫想される。この沁珠が守ろうとする“自己”が、ごく狭い男女の個別的關係の中のものでしかないことも事實である。だが、個人の男と女が關係の主導權を巡って、勝ち負けを争うという事態は、男女が對等な位置に立って初めて成立するものであることを、強調しておくべきだろう。恐らく沁珠が生きた 1920 年代の中國では、男女關係を巡るこうした力學は、まだ新しいものだった筈である。

但し沁珠は、相手の男に力をふるう“自己”という主體を選択したが、それは彼女が戀愛を遊戲と割り切って、そこから快樂のみを引き出していたことを意味しない。熱心にイエスを迫る子卿に對して、沁珠は彼の氣迫に押され、一瞬“自己”を忘れてイエスと答えそうになるものの、一人になって冷靜さをとり戻すと、豫め用意しているノーの答えを確認する。そして、自分には最終的には何故ノーの答えしかあり得ないのか、自分に言い聞かせるかのように、日記に書き付ける。

もう少し早く分かっていたら、私の心は彼 [= 伍念秋、沁珠の初戀の相手] に傷つけられることはなかっただろう。〔中略〕天が彼にあのようにな女の歡心を容易に得られる容貌や言辭を與えたことが、ひどく恨めしい。〔中略〕でも同時に、彼に感謝もせねばなるまい。もしこの時の教訓がなく、依然として世間知らずの少女のままだったならば、曹〔子卿〕があのように熱心に私に言い寄るのを見て、私は〔己を〕握って放さないでいられたとは言い切れない。伍のもとで私は人類が利己的だということを學んだ。だから私は心を、この既に大きな傷を負った心を、何人にも輕々しく與えはしない。とりわけ妻がいる男には。この種の男は愛に對して、更に當てにし難い。彼らは馬に乗って馬を探しているのだ。もし元の馬よりも

良い馬を見つけたら、彼らはすぐに必死になってその馬を追ってみる。だが追いつけなかった時には、面の皮を厚くして、また妻のもとへと戻ることができるのだ。〔中略〕今、曹は私にこのように誠實を盡くしてはいるが、これとて馬に乗って馬を探すことでない、とどうして分かるだろう。私は彼に取り合わない。最後には、彼とてやはり妻のもとに戻るることができるのだ。（p965～966）

沁珠が男にイエスを與えないと決意している背景には、初戀の挫折が教訓になっていることが分かる。その挫折を要約すれば、利己的な男が熱心に示す愛情を信じて、自分の心を軽々しく與えた揚げ句、男の愛情が當てにならないものだ、と氣付いた體驗となるだろう。また彼女が利己的と呼ぶ事情については、男が示した愛情が、妻と自分を天秤にかけける計算ずくの「技法」だった、というものである。換言すると、相手の男は「自然」な戀愛感情を自分に差し出していただけではなく、複數の女からイエスを獲得する遊戲をしていたに過ぎないのに対して、沁珠の方はそれと知らずに、“自己”の意志では制御できない「自然」な戀愛感情をその男に抱いてしまい、結果的に男との關係性で傷付けられ、主導權を奪われたと認識していることになる。男の側が女を遊戲の對象として扱っている以上、女の側もその遊戲で男に負ける、即ち關係の主導權を男に奪われる事態は回避せねばならない、というのが沁珠の決意だろう。

だがそれは逆に言えば、沁珠にとっての戀愛とは、「技法」を驅使した單なる遊戲ではなく、「自然」な愛情を裏切るものとしての遊戲だ、ということである。だからこそ、結果としては實現しなかったが、「自然」な戀愛感情に自ら溺れ、男女が對等に己の「自然」な愛情を相手に差し出すという意味での戀愛が、彼女の意識の中では“自己”を失う恐怖の源であると同時に、神聖なものと見做されているのであろう。<sup>40</sup> 男が自分に寄せる愛情を、「自然」のように装われた「技法」として沁珠が見ているのだとしたら、「自然」と「技法」の境界線をいかにして見極めるか、ということが次の問題になるだろう。

### 3. 遊戲に賭けられた死

しかし沁珠自身、「自然」と「技法」の間に、明確な境界線を見極める策が

あるわけではない。ようやく初戀の痛手が薄らいできた矢先、沁珠は同郷會で知り合った子卿と、急速に親密さを深める。沁珠は訪ねてきた素文に、子卿に愛情を抱いているわけではないが、彼と遊び歩く賑やかな生活は悪くないと語る。素文は“悪くないのは結構だけど、譯もなく人を害してはいけないわ。あなたはもとより遊びでしょうが、他人もそう考えているとは限らないでしょ！”(p916) と、沁珠に批判的な立場を取る。沁珠は素文の忠告に對して、自分が考える戀愛の一般論を根據に、婉曲に反論する。

最近、何通もの綺麗な戀文や、カードを受け取ったわ。私はそれらを全部、一冊のノートに貼り付けて、その一つ一つの下に、[戀文をくれた] その人に對する感想や、知り合う経緯を書いているの。將來、私が年老いた時に備えているんだけど、[その時には] その人達も當然、皆それぞれ [私との戀愛の] 結果が出ているでしょうから、また [このノートを] 取り出して見てみたら、面白いんじゃないかしら？ (p916)

沁珠は、自分に寄せる男達の戀愛感情が「自然」か、それとも「技法」なのかは、自分が將來年老いた時、初めて見極めることが可能になると考えている。逆に言えば、現時點では男の眞意を見極めることは出来ない、と言っているに等しい。妻帶者は當てにならないという前述の議論と併せて考えると、今「自然」な愛情を寄せているかに見える男も、いつかは自分への愛情を斷念して、別の女へと戀愛對象を變えるだろう、という一般論的な結果を豫測し、その豫測を根據にした上で、全ての男達の愛情は所詮、複數の女を天秤にかけて、計算ずくで立ち回った「技法」に過ぎない、と斷定しているのである。従って、沁珠が戀愛を遊戲と割り切って楽しむためには、その男達が他の女に對しても戀愛感情を抱くという具體例が、前提として必要になっていると言えよう<sup>(5)</sup>。

しかしだとすれば、男が彼女以外の女に全く心を動かさず、生涯を傾けて彼女一人だけに己を差し出すような、所謂「自然」な愛情を寄せるという事態が起きることによって、沁珠の戀愛遊戲を支える前提が崩壊することになる。そうした事態として例えば、彼女への愛情を全うするために妻との結婚を解消す

ることも、男の愛情が眞に「自然」な、唯一彼女に捧げられたものであるか否かを測る、試金石の一つとなるだろう。

熱心に愛情を寄せる子卿についても、離婚に踏み切ることまではないだろうから、現在とはともかく、將來まで當てに出来るものではないと沁珠は判断し、彼を戀愛遊戲<sup>ゲーム</sup>の對象として扱う。更に沁珠は、自分との戀愛を斷念させるために、彼女が彼にイエスを与える條件として、妻と早く離婚するよう、自ら子卿に提案しさえする。彼女自身の意識の中では、イエスカノーかの答えを保留にする一方で、實際行動の上では、子卿の愛情の不確かさを見極めようと、彼へのイエスをちらつかせる沁珠のこうした策は、彼女の意圖とは裏腹に、彼女をコケティッシュな存在に見せてしまう。最終的にイエスを言うつもりがないのなら、早くノーの答えを子卿に覺悟させるべきだ、と忠告する素文に對しても、沁珠は取り合おうとしない。

私は彼を自分の一生の伴侶にする必要はないけど、私の生命を彩ってもらうのには必要なよ……こうした考え方は、一般の人々の批評では、ひどく利己的だどうしても言われるでしょうけど。でも實際は、彼だって精神面で、既にかかなりの報酬を貰っているのよ。まして彼には妻もいるし、私のような異性の友人が増えたところで、彼の生活にとっては利點こそあれ、何の不道德なことはない、と言えるでしょ……だから、私の方も彼の好きにさせ、自由に私への誠實を捧げさせているの。私自身が足元をしっかりと固めていさえすれば、何か危険があるかしら？（p935）

子卿に既に妻がいることが、逆に沁珠の戀愛遊戲<sup>ゲーム</sup>を保證している點が興味深い。この既婚男性に對する沁珠の割り切った認識が、初戀の挫折から引き出した教訓と、ポジとネガの關係にあることは言うまでもないだろう。それ故に、彼女の豫想に反して、子卿が離婚を實現したことは、彼の愛情が紛れもなく、自分一人に捧げられた「自然」なものである可能性を、沁珠につきつけることになるのである。それは當然、男の、とりわけ既婚の男の愛情を一律、「技法」を駆使した遊戲<sup>ゲーム</sup>と見做してきた、沁珠の認識の根據が奪われるに等しい。その時彼女は、愛情の誠實さを確信し得ない相手に向かつて、己の「自然」な愛情



を差し出して傷付けられるという、封印してきた初戀時の恐怖と、再び向き合う危険に晒されるのである。

そもそも離婚を提案する以前の、かなり早い時點から、沁珠は子卿からの求愛のあまりの眞剣さに、不吉な結末を豫感して、戀愛遊戲という安全装置を放棄させられる恐怖を感じている。勿論、沁珠も、子卿が自分に最終的にイエスカノーの答えを迫った時には、豫め決めていたノーの答えを提示し、二人の關係は進展をみないまま終わり、子卿もいづれはまた別の戀愛對象を見つける、というシナリオを描いてはいる。事實、プロポーズされた時に、沁珠は彼にはっきりノーと答えている。にも拘わらず、二人の關係が彼女のシナリオ通りにならなかったのは、子卿がこの戀愛を巡って、結果的ではあるものの、自分の生死を賭けて、沁珠にイエスを迫っていたからである。

最初のプロポーズの時、沁珠が自分にイエスと答えようとしなないのを見て、子卿は急に咯血する。以前患った病が再發したのだが、失戀という精神的ショックが誘因になっていることは明白である上に、子卿は失戀したことで生きる意欲を喪失してしまい、容體は一向に回復しない。ここで重要なのは、子卿が萬一これで死ぬようなことになるならば、彼が沁珠以外の女性に愛情を寄せるようになることを將來に望むこともできない、ということである。つまり失戀が子卿の死の原因となることによって、彼女への愛情のために命を捧げた、という意味だけが残ってしまうのである。それによって、戀愛遊戲を支える前提が失われ、沁珠は遊戲を行使する“自己”の根據を奪われてしまう。彼女が遊戲を續けるために、とりあえずイエスと與えねばならなかった所以である。

だが、とりあえずの答えにせよ、本意に反して子卿にイエスと與えたことは、自分を窮地に追い込むことになる。素文は“だけどなぜ彼にまた、實現出来ない希望と與えたりするわけ！”(p943)と沁珠の身を心配して忠告する。沁珠自身、自分が置かれた事態の深刻さを認識していないわけではないが、それに對しては全く無策である。

この病が、私が原因で起きたことは、はっきり分かっているのよ。座して彼の命を救わないなんてことが、どうして出来る？結局、[私が彼に與えた承諾が]實現するか否かは、その後のことよ。もしかしたら彼の氣

持ちが變化するかも知れないし、何とも言えないわ。（p943）

沁珠が期待しているのは、事ここに至っても以前と全く變わらない。彼女は子卿がいつかは自分を諦め、自分と彼との關係が遊戲であつた、と確認出来る日が來ることを期待し續けるのである。そしてこの期待に縋り付き、イエスかノーかの答えを意識の中で保留し續けて、現在の二人の關係が遊戲であると見做そうとする。注意すべきなのは、子卿にとっては、沁珠がイエスを與えてくれた、という事實しか知り得ない以上、この答えの保留が沁珠の意識の中でしか確保されていないことである。従つてその後、子卿の離婚が成立し、再び結婚が具體化した時に、沁珠は改めてノーの答えを彼に明示する必要が生じてくる。だが、沁珠が自分に愛情を持っていると信じていた子卿からすれば、彼女のノーの答えは豫想外に映るだろう。この時の失戀のショックで、子卿は再び略血するのである。

子卿の略血を、沁珠は“私は結局また災難を招いてしまったわ。”（p977）と嘆く。そして沁珠はまた子卿にイエスを與え、その次の瞬間にはまたノーと言ひ、最終的な答えを保留にして、眼前の事態をやり過ごそうとする。しかし結局、子卿は沁珠のイエスを得られないことを悟り、失意のうちに急死をとげるのである。客觀的には、いつかは子卿が自分を斷念してくれるだろう、という甘い見通しに寄り掛かったことが、結果として沁珠自身の振る舞いをコケティッシュなものにしてしまい、それが彼の命を奪う原因にもなってしまう、という構圖が讀みとれる。だが沁珠の思惑の側に立つて見るならば、事態は些か異なつた様相を呈するだろう。子卿の死によって、彼が他の女に心變わりする可能性も奪われ、受け取りたくもない、彼女一人に捧げられた「自然」な愛情、という唯一の意味だけが沁珠の手元に残される。

あなたの屍の前で哀悼しているのは、なぜ全國の民衆ではなく、他に抱負をいだき、あなたの深い愛情に背いた人間なのでしょう？ 長空〔=子卿〕！ 幻想を追い求めたことで、終にあなたは命をさっさと斷つてしまい、同時に私はあなたに終生、疚しさを感じさせられるのね。（p993）

沁珠は、子卿が自分のためではなく、革命の大義のためにこそ死ぬべきだったのにと嘆いている。もっとも子卿にとっては、革命の大義のために戦うことも、自由戀愛を遂行することも、いずれも「自然」な“自己”を回復する行爲であったのだから、その意味では、沁珠は彼を誤解している。寧ろここで確認すべき點は、沁珠が嘆く對象が、子卿という個人の死そのものではなく、彼女への叶わぬ愛ゆえに死んだ彼に對して、その死の責任を負わねばならなくなった己の不運に對してだ、ということであろう。ここからは、子卿が大義のために死んだのであれば、自分は疚しさを感じなくても済んだのに、という沁珠の恨み言が聞こえてくる。以後、沁珠は子卿の死について、取り返しがつかない罪を犯した、と後悔させられるようになるのである。

だが今や子卿が死者であることは、沁珠にとっては恩寵でもあるだろう。死者との一方通行的な関係では、もはや裏切られ傷付けられる可能性もない。罪惡感が伴うにせよ、沁珠は己の「自然」な心情を、死者となった子卿に、安心して差し出すことが出来るのである。沁珠が子卿から送られた象牙の指輪を、彼の死後、左手の薬指に嵌め變えるのは、生前から彼を愛していた證しと言うより、彼の死によって初めて可能になった関係をただ單に追認した振る舞い、とは言えないだろうか。

#### 4. おわりに

自分さえ明確にイエスを與えなければ、戀愛で深刻な事態には至らないだろう、という見通しはもはや成立しない。「自然」な戀愛感情に任せても、戀愛「技法」を驅使しても、いずれにせよ、相手の男は“自己”の意のままにはならない上に、逆に自身が傷付くかも知れないとしたら、自由戀愛を巡る男との全ての関係は、沁珠にとって恐怖の源でしかない。沁珠は以後、男との全ての関係から、遠ざかるしかなかったのである。だとすると、左手の薬指に象牙の指輪を嵌めて、子卿の墓前で泣くのは、彼個人への懺悔であると同時に、一方的に戀愛感情を寄せてくる、男達から遠ざかる口實とも考えられる。

その數年後、彼女は再び、男友達との賑やかな交際を始める。その男友達の一人が沁珠に戀愛感情を抱いていることに、露沙は氣付き注意を促す。沁珠自身もそのことには氣付いており、自分には戀愛關係へと進める意志がないこと

を明言する。

その〔＝子卿の時のような悲劇を繰り返さないこと〕ためには、すぐく  
氣を付けるつもりよ。でもね、私だって時には、純潔な熱情が本當に必要  
になるの。だから彼が心を開いて、私を受け入れる時というのが、本當に  
危険なのよね。隱〔＝露沙〕、恐ろしいことだと思わない？もし私が少し  
でも氣を付けなかったら……（p1010）

二度の不幸な戀愛を経て、沁珠は戀愛が始まる以前から、相手の男と戀愛關  
係そのものを持たないよう身構えている。だが戀愛になる一步手前で、男達と  
交際する“純潔な熱情”を楽しみたい、と沁珠が考えていたとしても、彼女の  
そうした危うい思惑とは別に、否應無しに男達の戀愛の對象にさせられてしま  
う。そして繰り返すが、それらの男達からの求愛は全て、今の沁珠にとっては  
恐怖でしかないのである。その後の沁珠は、男達の關心の對象となることは受  
け入れ、賑やかな交際を楽しむ一方で、男達が彼女への求愛の姿勢を露にした  
途端、慌てて逃げるという行動を幾度か繰り返す。子卿の墓前で泣いているこ  
とだけが、二度と男女関係で判斷ミスを犯して“自己”を失うことがない、逃  
げ場となるのである。

男の優位に立とうとし、選擇權を行使する誇り高い女のかつての姿は、もは  
やここには見られない。恐らく沁珠は、全ての戀愛遊戲<sup>ゲーム</sup>を一人棄權し、子卿に  
對して精神的に殉死することを、結果的に選ぶしかなかった、己の不運を噛み  
しめていた筈である。

#### 註

- (1) 廬隱は石評梅が遺した日記を所持しており、その日記を出版する計畫も具體的に  
進行していたが、結果的に出版社の倒産で實現しなかった。その後、廬隱は《象  
牙の指輪》という小説を書くことで、石評梅の傳記を再構成することになったが、  
小説中に引用された日記と、石評梅が遺した日記の異同については、後者が現存  
しないため詳細は不明である。以上は、劉思謙《“娜拉”言說—中國現代女性作家  
心路紀程》（上海文藝出版社、1993年12月）第3章石評梅についての記述に據る。  
尙《象牙の指輪》は、1931年に《小説月報》第22卷6～9月號、11～12月號に  
1～17章が掲載されたが、商務印書館の焼失によって、小説の最後の3章は刊行

されないまま終わった。その後、《小説月報》編輯者の求めに應じて、焼失した 18 ～ 20 章の原稿を再度書き直し、1934 年 2 月上海商務印書館から單行本を刊行。錢虹編《廬隱集外集》(書目文獻出版社、1989 年 5 月)の著作繫年目録の注の記述に據る。本稿での使用テキストは、《廬隱小説全集》(時代文藝出版社、1997 年 3 月)を使用した。

- (2) 《象牙の指輪》に限らず、廬隱の小説中には、女性登場人物が現實の戀愛關係を「遊戲」と見做す認識が頻出するが、概してその「遊戲」を現實からの逃避として否定的に評價した上で、そうした現實逃避を女性の個人的心理に還元する傾向が強い。本稿では後述するように、《象牙の指輪》に即して、戀愛を巡る「遊戲」を、女性が行使する「技法」ととらえることで、廬隱の小説が持つ可能性を見い出そうとする試みである。廬隱に関する主要先行研究としては、佐伯慶子『廬隱—その生涯と文學』(『櫻美林大學中國文學論叢』5 號、1974 年 12 月)、中本百合枝『五四時期の女流作家廬隱の作品に見える悲哀の表現』(『國學院雜誌』1986 年 7 月號)等がある。
- (3) 原文は“自我”。後述する沁珠の“自己”についても、原文は“自我”である。尙、括弧付きの“自我”という語は、全小説中、子卿、沁珠ともに 1 例づつ、本稿で引用した箇所に見られる。更に沁珠については、括弧なしの自我の用例が數例見られるが、そのいづれもが、戀愛相手の前で“我を失う”といった文脈で現れている。
- (4) 紙幅の關係で論じなかったが、沁珠の初戀は彼女に精神的トラウマを與えたにも拘らず、相手の男への戀愛意識は一貫して保持している。その戀愛意識は單に今でも男を愛しているというレベルの意識ではなく、かつて紛れもなく存在した「自然」な愛情という状態に固執する意識だと思われる。こうした沁珠の意識から、戀愛というものの觀念性が伺え、興味深い。
- (5) 沁珠は男が寄せる戀愛を、截然と「自然」と「技法」とに分離しているが、「技法」を行使する自身については、それは飽くまでも外見のことで、自分には他人には隠された「自然」な内面が確保されている、と意識している。この「自然」な内面は、主として女友達への告白や日記という形で、表出されている。そもそも沁珠は、女友達に見せることを前提に、日記等を書いているような印象を受ける。これについては、別稿に改めて論じてみたい。